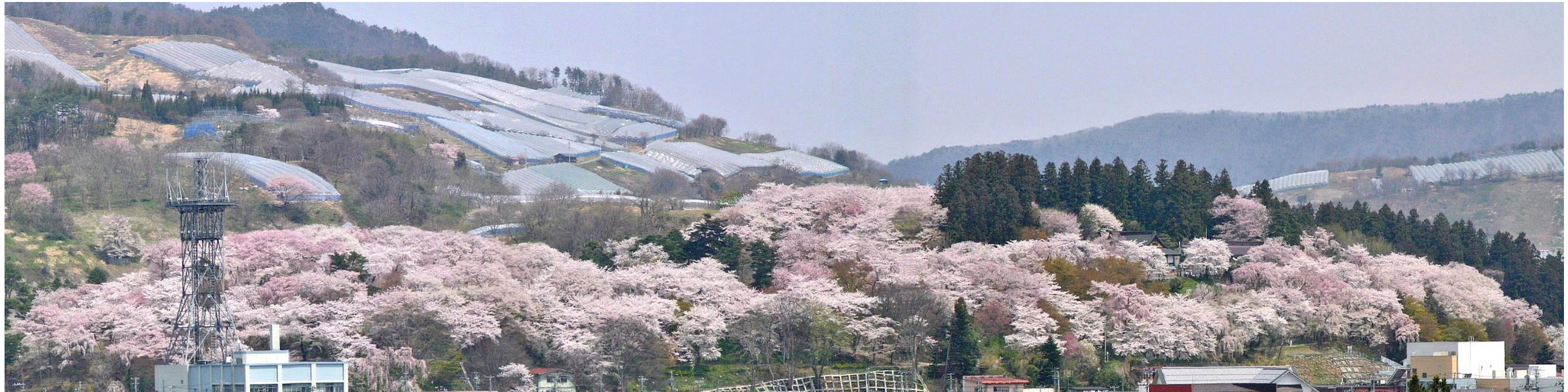


烏帽子山公園周辺整備計画



表紙写真撮影 加藤正人氏

平成30年2月

南陽市

日本人と花見

さくらの起源は「サ」+「クラ」で、サは5月、五月雨、早乙女、早苗などから山の神、田の神、豊穰の神を表し、クラは神座、秋に山に戻った神が里におりてくるという意味をあらわすといわれている。イネとさくらは、豊作の神「天津日高日子万能邇邇苾命（あまつひこほのにきりのみこと）」とさくらを象徴する神「木花之佐久夜毘売（このはなのさくやひめ）」として古事記にも記載されている。

さくらは種まき桜などと愛称され、本州でも近畿地方から東北地方までは農耕作業開始時期とさくらの開花時の同調があることから、現在でも農事暦としての指標を持つものである。

花見は、飛鳥時代など古代には上流社会においては梅がもてはやされていた。万葉集では梅 120 首に対し、さくらは 50 首に過ぎなかった。しかし平安時代になると、花は日本古来のさくらという評価が定着した。960 年頃、京都御所の梅が火災によって消失した跡に、さくらを植え返したとされる「左近の桜」は有名である。

その後も、さくらは里に植栽され愛でられ、さらに新しい品種や花を咲かせるものに改良が続けられてきた。江戸時代になると、徳川三代にわたる将軍の花好きも功を奏し、参勤交代などにより地方のさくらが江戸に集められた。元禄時代を過ぎると、貴族と上流階級のものであった花見も広く一般庶民にまで広がってきた。幕府も、さくらの花見の新名所をつくりはじめ、江戸の御殿山、飛鳥山、墨田堤などにさくらを植栽し、「江戸新名所記」などの名所案内が次々につくられた。その後、これらの花見の風習は、地方にも影響を与え現在に至っている。




南陽市

発行 平成 30 年 2 月

建設課管理計画係

〒999-2292 山形県南陽市三間通 436-1

TEL 0238-40-8392 FAX 0238-40-3422

 <http://www.city.nanyo.yamagata.jp>